3．現地研修

(1) 現地研修プログラムの視点

現地研修のプログラムは、次の３つの視点から内容を検討し、組み立てました。

[ＪＩＣＡ事業視察] 訪問国における主なＪＩＣＡの開発援助事業の視察を通してマラウイに学ぶ。
[多様な交流] 現地の協力隊員との交流、現地の人との直接交流を通してマラウイに学ぶ。
[訪問国の特色見学] 訪問国の自然、都市、歴史、文化に触れる機会を通してマラウイに学ぶ。

(2) 学びの視点

また、次の「学びの視点」をもって現地研修ができるよう、事前に現地と調整するとともに、事前研修のプログラム提供、「マナビノオト」への掲載、現地研修でのワークショップなどを行いました。

◆ 訪問国理解
・人びとの生き方（現地のおとな、こども、隊員）を通し、訪問国のよいところ、誇りを探る。

◆ 多様性理解
・人や文化の多様性を体感し、文化に優劣はないこと、自分がスタンダードではないことを理解する。

◆ 同一性理解
・多様であってよいものと違っていてはいけないものについて理解する＝人権の普遍性。
多様性と同時に、人の心の同一性について理解する。

◆「援助」をふりかえる
・訪問国が抱える課題を知り、人権と環境の視点から自立のために必要な開発援助をふりかえる。

◆ 日本をふりかえる　自分をふりかえる
・訪問国から学んだことを通して、今一度、日本の誇り、日本の課題、わたしたちの課題について考え、今後につなげる。

(3) ガーナ共和国の現地研修スケジュール

ガーナ共和国における現地研修スケジュールは次のとおり行いました。次ページに訪問地地図を示します。

期日	内　容	宿泊地
7／28（水）	名古屋空港09:00…（1時間5分）→10:05成田空港14:05…（11時間10分） →17:15ヒースロー空港（ロンドン）→ホテルへ	ロンドン Ramada Jarvis Heathrow Hotel
29（木）	▣ ワークショップ（ホテルの中庭）～相手の思いを引き出すインタビュー ・ ヒースロー空港14:25…（6時間35分）→20:00アクラ空港（ＪＩＣＡ現地職員等出迎え）→ホテルにチェックイン	アクラ Airside Hote (10人) Mariset Plaza (2人)
30（金）	◈ 08:30 ココアの輸出選別・出荷の行程、テマ港の見学 ★ 11:45 大使館表敬訪問（大使）　★ 14:30 ガーナ教育省訪問（副総裁） ★ 16:00 ＪＩＣＡガーナ事務所訪問（概要説明、治安対策、健康のオリエンテーション）	アクラ La Palm Royal Beach Hotel
31（土）	● 09:00 青年海外協力隊（野球指導）現場訪問（テマ） ◈ 午後　野口英世記念庭園、市内マーケット見学（アクラ） ★ 19:00 ＪＩＣＡ職員・専門家・協力隊員と会食交流	アクラ La Palm Royal Beach Hotel
8／1（日）	◈ 午前　アブリ植物園、ブティの滝見学 ▣ ワークショップ（車中）～会食交流で各自が得た情報共有～ ◈ 午後　アコソンボダム見学	ホ Freedom Hotel
2（月）	● 11:00 協力隊（理数科教師）任地活動視察（ケジェビ：大規模校） ● 15:00 協力隊（理数科教師）任地活動視察（タニベ：小規模校） ★ 生徒との文化交流	アクロポン Palm Hill Hotel
3（火）	▣ ワークショップ（ホテル朝食時）～学校の様子（ガーナと日本）～ ★ 08:30 ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクト実施郡（アクアピン・ノース）教育長表敬訪問／郡役所への表敬訪問 ★ 10:30 教員養成校表敬／校内小学校への訪問（授業参観・交流） ● 13:30 ＳＴＭプロジェクト活動視察 ◈ 15:30 テテクアシ・カカオ農園見学 ★ 18:30 日本大使公邸でのパーティー出席	アクラ La Palm Royal Beach Hotel
4（水）	● 10:30 ニューアブリムＰＰＡＧ地域保健総合改善プログラム視察 ◈ 18:00 クマシ王宮、ナショナル・カルチャーセンター（既に閉館）	クマシ Royal Park Hotel
5（木）	◈ 11:00 ケープコースト城見学　◈ 15:00 エルミナ城見学	タコラディ Hill Crest Hotel
6（金）	● 08:30 協力隊（ポリテクニック活動）任地活動視察（タコラディ） ● 14:00 オチェレコ小規模灌漑農業振興計画視察 ★ 19:30 ＪＩＣＡガーナ事務所報告、関係者との懇親会	アクラ La Palm Royal Beach Hotel
7（土）	◈ 09:00 アクラ市内トレードフェアでの買い物、野口英世研究室見学 ▣ ワークショップ（ホテル中庭）～実践活動に向けて～ ・ 20:00 ホテル発　　アクラ空港22:25…（7時間）…	機内
8（日）	・ 06:25ヒースロー空港13:40…（11時間30分）…	機内
9（月）	・ →09:10成田空港　（解散）	－

※凡例：◈…訪問国の特色見学、★…多様な交流、●…ＪＩＣＡ事業視察、▣…ワークショップ

ガーナ共和国地図

Base 802425 (A00953) 12-95

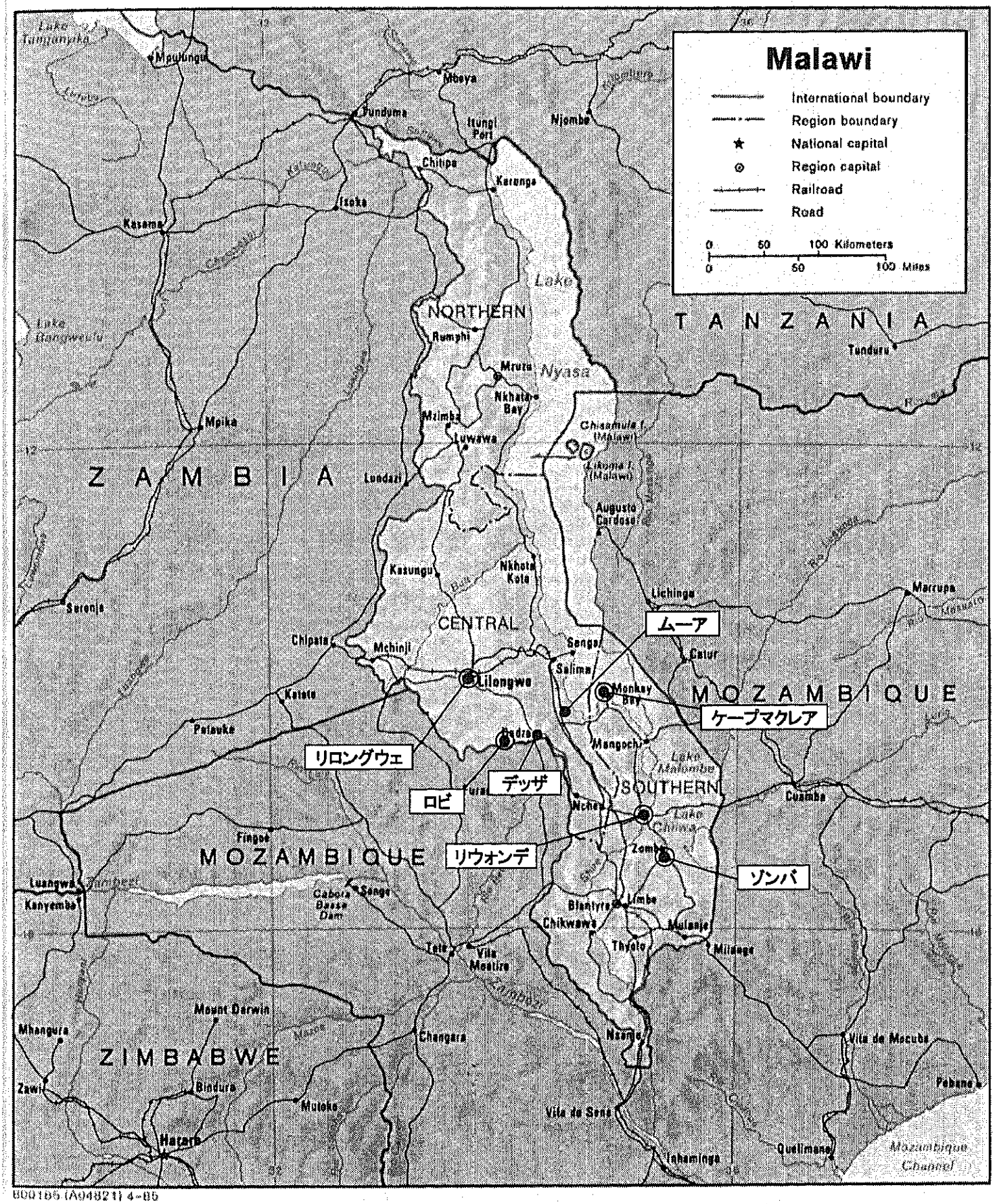
(4) マラウイ共和国の現地研修スケジュール

マラウイ共和国における現地研修スケジュールは次のとおり行いました。次ページに訪問地地図を示します。

期日	内　容	宿泊地・ホテル
7/28（水）	・名古屋空港17:20…(6時間) →22:20香港空港23:40…(13時間15分)	機内
29（木）	・06:55ヨハネスブルグ空港10:20…（2時間25分）→12:45リロングウェ空港（ＪＩＣＡ職員出迎え）→14:00ホテルにチェックイン ◈ 16:00 ＪＩＣＡマラウイ事務所訪問、オリエンテーション ▣ 21:00 ワークショップ～マラウイ到着当日の感想の共有～	リロングウェ Capital Hotel
30（金）	◉ 13:40 ドマシ教員養成大学視察　★ 小学校訪問・交流	ゾンバ Ku Chawe Inn
31（土）	◉ 08:00 ドマシ水産養殖プロジェクト視察 ◈ 15:00 ゾンバ市内マーケット見学（古着・野菜など） ▣ 18:00 ワークショップ～３枚の写真、２つのデータ・言葉から～	ゾンバ Ku Chawe Inn
8/1（日）	◈ 11:30 リウォンデ国立公園ツアー（野生生物）	リウォンデ
2（月）	◉ 13:30 小規模灌漑技術開発調査 Tilime村、Tikorele村、Mankhamba村視察	リロングウェ Capital Hotel
3（火）	▣★09:00 青年海外協力隊員（ロビ・デッザ）とのワークショップ ～２つのワードで自己紹介、隊員の経験の共有、 マラウイへの感想ー違い・多様性ｖｓ同一性・共通、 今後話したい・体験したいテーマ～　→昼食会 ◈ 14:00 マーケット見学　★ 17:30 地元ホームステイ	ロビ 各現地人宅（１人１家庭へ）
4（水）	◉ 09:00　ロビ園芸適正技術普及視察 ◉ 13:00 協力隊任地（チュワ）中等学校へ授業参観 ★ 日本教員による模擬授業、日本文化紹介と交流 ▣ 21:20 ワークショップ～マラウイの暮らし・日本の暮らし あるものないものーホームステイの経験から～	リロングウェ Capital Hotel
5（木）	★ 09:45 協力隊任地学校へ 日本と現地の模擬授業、日本文化紹介 ★ 14:20 保健行政アドバイザー、ＪＩＣＡ専門家からのお話 ★ 17:20 ＪＩＣＡマラウイ事務所報告	リロングウェ Capital Hotel
6（金）	◈ 08:00 リロングウェ市内買い物 ◈ 13:10 ムーア博物館見学　◉ 16:40 マンゴチ橋視察	ケープマクレア Club Makokola
7（土）	◈ 10:00 ケープマクレア散策 ★ 19:00 ＪＩＣＡ現地関係者との懇親会	リロングウェ Capital Hotel
8（日）	・リロングウェ空港13:35…（2時間25分）→16:05ヨハネスブルグ空港→ヨハネスブルグのホテルへ	ヨハネスブルグ Holiday Inn Garden Court Johannesburg Intern'l Airport
9（月）	▣ 8:35 ワークショップ～幸せとは何か、どんな力を育むことが幸せにつながるのか～　実践に向けて ・ヨハネスブルグ空港12:50…（13時間10分）…	機内
10（火）	・08:00香港空港09:00…（5時間40分）→15:40名古屋空港　（解散）	－

※凡例：◈…訪問国の特色見学、★…多様な交流、◉…ＪＩＣＡ事業視察、▣…ワークショップ

マラウイ共和国地図


Malawi
International boundary
Region boundary
National capital
Region capital
Railroad
Road
0 50 100 Kilometers
0 50 100 Miles
TANZANIA
ZAMBIA
MOZAMBIQUE
ZIMBABWE
NORTHERN
CENTRAL
SOUTHERN
Lake Nyasa
Lilongwe
Blantyre
Zomba
Mzuzu
Mangochi
Monkey Bay
Salima
Nkhotakota
Nkhata-Bay
Karonga
Chitipa
Rumphi
Mzimba
Mchinji
Dedza
Ntcheu
Mulanje
Thyolo
Chikwawa
Nsanje
Mwanza
Tete
Vila Manica
Cabora Bassa Dam
Luangwa
Kanyemba
Mount Darwin
Mutoko
Harare
Bindura
Zawi
Mhangura
Changara
Vila de Sena
Inhamingo
Quelimane
Mozambique Channel
Vila de Macuba
Pebane
Milange
Cuamba
Nacala
Marrupa
Tunduru
Lichinga
Catur
Senga
Augusto Cardoso
Chiamula I. (Malawi)
Likoma I. (Malawi)
Luwawa
Mpika
Lundazi
Kasama
Isoka
Mbeya
Tunduma
Itungi Port
Njombe
Mpulungu
Serenje
Chipata
Katete
Petauke
Kasungu
Nkhota Kota
Fingoe
Lake Tanganyika
Lake Bangweulu
Lake Malombe
Lake Chilwa
Lake Rukwa

4．帰国後のプログラム

(1) 概要

帰国後、研修参加者が実践のためのプログラムづくりを円滑に進められるように、事後の研修を行いました。また、実践した内容を研修参加者同士、あるいは広く一般の人も含め、発表・評価しあうために、実践報告会を開催しました。

- ◈ **開発教育指導者研修　第3回（9月）、第4回（1月）**
- ◈ **実践報告フォーラム２００４（1月）**
- ◈ **北陸地区事後研修（9月）　［ＪＩＣＡ北陸主催］**
- ◈ **北陸地区帰国報告会（1月）［ＪＩＣＡ北陸主催］**

なお、訪問国での経験や教育現場での実践活動を記録に残し、参加者自身の糧とし、次へつなげるために、現地研修の「研修報告書」と実践活動の「実践報告書」を、研修参加者に所定の様式でまとめてもらいました。各報告書の項目は次のとおりです。

「研修報告書」の項目	「実践報告書」の項目
1 個人やチームでの現地研修の目的やねらい（主眼点・期待）とその達成度	1 基本事項（実践教科等・時間数・対象・人数）
2 訪問国や参加者・スタッフから学んだこと（気づいた、大切に思った、うれしかったこと）	2 カリキュラム
3 研修の経験の何を何につなげようと思うか	① 実践の目的
4 ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案	② 実践の構成（時限、方法、教材・資料）
5 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことやより良くするための提案	3 実践の詳細
6 その他全般を通じての感想・意見など	① どのような教材を用いたか
7 訪問先ごとの気づきや築きなど	② どのような授業を行ったか
① 発見したことや学んだこと	③ 児童・生徒の反応や評価は？
② それを何につなげられるか	④ 先生ご自身の所感、反省点、今後の改善策
	4 実践の中で使用した資料など
	① 写真　② 現地で収集した資料など
	③ 引用文献　④ その他の教材

(2) 開発教育指導者研修（第3回、第4回）

4ページの開発教育指導者研修全4回のねらいの後半を実現するために、帰国後の9月に第3回研修を行い、翌年1月に第4回の研修を行いました（詳しくは「平成16年度開発教育指導者研修・実践講座報告書」を参照）。

● **第3回開発教育指導者研修**（とき：9/4（土）～9/5（日）、ところ：ＪＩＣＡ中部講堂）

◈ ねらい

- ・開発教育・国際理解教育を通して伝えたいこと、扱いたいことを整理する。
- ・「材料」と「手法」を吟味し、流れのあるプログラムを作る。
- ・作成したプログラムをプレゼンテーションし、評価・提案をしあう。
- ・ファシリテーターの役割をふりかえる。

◆ プログラム「プログラムを作ってみよう！」

1日目［12:30－17:30］	2日目［9:30－16:00］
1 研修ねらいの確認［10］	9 ＪＩＣＡタイム～愛知県推進員より［38］
2 アイスブレーキング～60秒メッセージと傾聴による自己紹介［31］	10 昨日のふりかえりと本日のねらいの確認［8］
3 みんなの期待に応えるためにできること［23］	11 プログラムづくりとプレゼン準備［44］
4 各種資料を読みとく［43］	12 プログラムプレゼンテーションと提案会［180］（1チーム20分×8チーム）
5 また経験していないアクティビティ紹介［65］	13 「よかったねカード」「提案カード」を基に、プログラム再検討と共有［30］
6 扱いたいテーマ、育みたい力［20］	14 全体ふりかえりと連絡事項［20］
7 プログラムづくり［90］	
8 もっと知りたいＪＩＣＡ［5］	

◆ ファシリテーター　：　（特活）ＮＩＥＤ・国際理解教育センター山中令子さん

● **第4回開発教育指導者研修**（とき：1/22（土）12:30～18:00、ところ：ＪＩＣＡ中部講堂）

◆ ねらい

・指導者研修参加者と教師海外研修参加者の実践ふりかえりと課題の共有

・一般参加者に向けた自分たちの実践のプレゼンテーションと今後の可能性の共有

◆ プログラム「実践評価＆「ここから」を創り出す」

1 研修ねらいの確認［10］
2 アイスブレーキング～「幸せ」のロールプレイ［64］
3 実践報告フォーラムの説明と今日の作業の確認［20］
4 展示・発表のグループ分けと作業の説明［34］
5 グループごとの実践の共有と課題のまとめ［55］
6 「ポスターセッション」に向けた模造紙とミニワークショップの準備［80］
7 チーム決定事項の全体共有［30］

◆ ファシリテーター　：　（特活）ＮＩＥＤ・国際理解教育センター 山中令子さん

(3) 実践報告フォーラム2004

教師海外研修参加者および開発教育指導者研修参加者の実践活動の発表・評価の場として、一般の人も参加できる「実践報告フォーラム2004」を1月に開催しました。

◆ ねらい

・研修者が、研修のふりかえりと実践の評価をしあい、今後の可能性を検討・共有する。

・一般参加者が、経験者の実践についての成果と課題を共有し、自分の実践へとつなげる何かを持ち帰る。

・ＪＩＣＡの開発教育・国際理解教育研修事業に関心を持つ人、次の参加者を広げる。

◆ とき・ところ

・日時：平成17年1月23日（日）午前10時～午後4時30分

・場所：愛知県図書館5階大会議室

◆ 参加者数　約80人（研修参加者、一般参加者、スタッフ）

◈プログラム「開発教育(国際理解教育)の指導者研修・教師海外研修参加者による実践報告フォーラム 2004」

時刻	内　容	講師等
10:00	1 開会 ・主催者あいさつ ・本日のプログラム紹介、その他の案内・注意事項	◇全体進行　甲斐尚子調整員 ◇あいさつ　松田教男所長
10:10	2 アイスブレーキング ・一般参加者は「持って帰りたいもの」「何か貢献できるもの」、研修参加者は「今日提供できるもの」「研修での一番の発見」で自己紹介	◇ファシリテーター　山中令子さん
10:50	3 パネルディスカッション ・研修の概要紹介 ・開発教育指導者研修、教師海外研修参加者による研修報告と意見交換	◇研修の概要紹介　川合眞二さん ◇パネリスト 上手留実子さん（ガーナ派遣代表） 岩脇達典さん（マラウイ派遣代表） 脇田智恵さん（指導者研修者代表） 松田教男所長 ◇コーディネーター　山中令子さん
11:40	4 ブースアピールタイム ・午後の会場配置と動きの説明 ・ブースA～Hまでの一言アピール	◇進行　甲斐尚子調整員 ◇研修参加者各ブース代表８人（※）
13:15	5 ポスターセッション&ワークショップ（前半） ・全体の進め方の説明 ・ポスターセッション各ブース（A～D）発表 ・質疑応答・ミニワークショップ	◇進行　山中令子さん ◇各ブース（A～D）研修参加者（※） 〃
14:35	6 ポスターセッション&ワークショップ（後半） ・ポスターセッション各ブース（E～H）発表 ・質疑応答・ミニワークショップ	◇進行　山中令子さん ◇各ブース（E～H）研修参加者（※） 〃
15:50	7 全体共有 ・ふりかえり（見つけたもの／次につなげるもの）	◇進行　山中令子さん
16:15	8 ＪＩＣＡ中部からのお知らせ	◇甲斐尚子調整員
16:25	9 閉会　次につなげるあいさつ	◇研修参加者代表　中澤進さん

※ 研修参加者の役割分担（順不同、敬称略）

A　共生～幸せとは？～　／◉◈賀島美恵子、◉☆松川弥生、◉◇松山純子、◉△湯木朋子、◉◈渡邉三知子
B　多文化理解・小学校１　／◉☆岩脇達典、◉金森美津子、◈◇田口恭子、◉△千葉寿子、◉◇松本留美子
C　多文化理解・高校　／◉☆高野純子、◉◈田邊愉美子、◇△手塚聖子、◈◇寺田仁、◉◈花房範子
D　国際理解教育って？　／◉◈片川宣彦、◉◈中澤進、★◇樋口創、◉☆細井博史、◉△脇田智恵
E　人権（中・高生向）　／◉☆上手留実子、◉△木村友美、◈白浜陽子、◉★田中千賀子、◇松田教男
F　多文化理解・小中学校　／◉◈榊原喜子、◉△佐藤典子、★◇角亜矢子、◉☆二宮佐代、◉△横山真智子
G　マラウイボール　／◉◈鈴木富雄、★鈴村奈緒美、◉☆深沢和人、◉△水谷有未子、◉◇水野悟
H　貧しい？豊か？　／◉△石井里絵、◉伊勢野大蔵、◉栗田寛、◈◇佐藤浩二、◉中津俊彦、☆廣田栄克

（凡例：◉：実践事例発表、◈：ファシリテーター（★：全体進行）、☆：ブースアピール、◇：まとめ、△：記録）

(4) 北陸地区事後研修

北陸地区の研修参加者を対象に、現地研修の経験を活かした授業プログラムづくりに資するため、ＪＩＣＡ北陸主催で次のような事後研修を開催しました。

◆ とき・ところ

・と　き：平成16年9月11日（土）午前10時～午後4時

・ところ：ＪＩＣＡ北陸 セミナールーム

◆ プログラム

時刻	内　容	講師等
10:00	1 開会のあいさつ	◇ＪＩＣＡ北陸　有賀秀夫支部長
10:05	2 昨年度の教師海外研修参加者のあいさつ	◇15年度研修参加者 竹内美幾さん
10:10	3 開発教育・国際理解教育基礎講座	◇講師・ファシリテーター とやま国際理解教育研究会 朝比奈裕子さん、伊藤通子さん
10:30	4 授業プログラム作成準備	
13:30	5 授業プログラム作成	
16:30	6 質疑応答	
17:00	7 閉会	

(5) 北陸地区帰国報告会

北陸地区の教師海外研修参加者の発表・評価の場として、一般の人も参加できる北陸地区帰国報告会をＪＩＣＡ北陸主催で開催しました。

◆ とき・ところ

・と　き：平成17年1月15日（土）午後1時～午後3時30分

・ところ：金沢パークビル１１階大会議室

◆ 参加者数　約40人（研修参加者、一般参加者、スタッフ）

◆ プログラム「アフリカでの研修経験を国際理解教育へ！」

時刻	内　容	講師等
13:00	1 開会、主催者あいさつ	
13:10	2 ガーナ研修報告	◇高田正光さん、中谷司さん
13:30	3 マラウイ研修報告	◇今井由美子さん、岩脇達典さん
13:50	4 国際理解模擬授業　ガーナってどんな国？	◇坂本久美さん
14:30	5 ディスカッション ・国際理解授業を実践してみて	◇谷口徹さん、河上康一さん 福島直美さん、松山純子さん
15:15	6 質疑応答	
15:30	7 閉会	

5．研修の成果と課題～あとがきに代えて

国際理解教育を実践推進するＮＰＯであるＮＩＥＤ・国際理解教育センターが、ＪＩＣＡ中部・ＪＩＣＡ北陸の教師海外研修のファシリテートを、開発教育・国際理解教育指導者研修の一環として受託するにあたり、大切にしたポイントは以下の３点です。

★「国際理解」の真の目的は何かを考え、理解を深めるプロセスを提供する
★ 多様な体験から一人ひとりが気づいたことを、「持続可能な共通の未来」作りへとつなぐ
★ 教員自らの体験が、こどもたちの「共に生きる力」を育むことに活かされるよう支援する

成長と限界、発展と戦争の 20 世紀を超え、わたしたちが持続可能な 21 世紀を築くために必要なものは、自らをふりかえり、他者から学び、違いを受け入れ、学び合い、問題を共に解決していくことのできる力を身につけることであると考えます。人類共通の課題を理解し、他者と協力して解決することのできる主体＝知り・考え・行動する主体を育む教育としての理念と学びの手法を持つ開発教育・国際理解教育が、教員にこそ深く理解され、海外研修を通した自らの体験を活かし、学習者が自ら学ぶ場を作りだし、その結果学習者の国際理解が深まること。教員も生徒も、知り、考えたことが行動につながること。その一連の流れをサポートすること。これらがＮＩＥＤの役割でした。

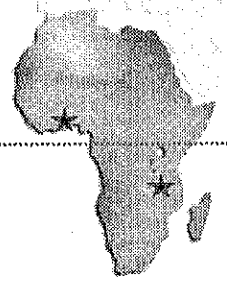
ＪＩＣＡスタッフとＮＩＥＤスタッフは協働して学びのプロセスを作りました。すべてのプロセスにおいて関わる人々が参加型で学び合うことと、研修者が明確な個人のビジョン、チームとしてのビジョンを持ち研修に主体的に関わることをサポートしました。その成果としてあげられることは、関わった一人ひとりのそれぞれの良さへの気づきがあり、共に学び合う仲間としてのネットワークができました。また、開発途上国に関する認識が多様に深まりました。貧しい＝不幸ではないこと。開発援助に対する我々の責任を、体験を通して実感したこと。国籍文化の違いに関わらず、人と交わる暖かさを体感実感できたこと。日本と途上国との違いと同一性に対する理解が深まったこと。協力隊員を通して日本に誇りを持てたこと。途上国から日本をふりかえり、今一度「豊かさとは何か？」が、今後の自らの課題となったこと。実体験を通して自分が感じ考えた事を子どもへ還元したい！という意欲を持てたという感想と、開発教育・国際理解教育の奥深さを体感したという感想を得たことは何よりの成果でした。

反面、現地事務所と日本の事務局との情報共有（研修計画の目的や具体的内容のすりあわせ）がスムーズに行かなかったこと、現地での行程に関して、出発間際まで変更があり、事前に参加者へ詳細な情報を伝えることができない部分は、参加者にとっては不安であった点が課題としてあげられます。さらに、海外研修参加者のみを対象にした事前説明会を早い段階に行い、参加者相互のコミュニケーションを密にしておくこと、情報共有や現地での行動計画を事前に話し合える時間的余裕を取ること、現地での学びにも多少のゆとりを持たせること、個人としての学びの目的はそれとして、チームとしての学びに各自が主体的に貢献できる意識を持つことなども、今後の課題としてあげられます。

最後に、初めてのＪＩＣＡ－ＮＰＯ協働による教師海外研修事業、たくさんの方々のご協力を得、時間と場と思いを共有し、研修に参加をされた方々同様、わたしたちも多くを学ぶことができました。成果を喜び、失敗から学び、課題を今後に活かし、よりよい研修とよりよい未来を作り出すために、この報告書が役立てば幸いです。

（特活）ＮＩＥＤ・国際理解教育センター　代表　山中令子

II 研修報告書



● ガーナコース研修参加者

(1) 羽島市立竹鼻中学校／上手留実子さん 19
(2) 愛知県立豊田東高等学校／髙野純子さん 23
(3) 津幡町立条南小学校／坂本久美さん 28
(4) 富山県立氷見高等学校／髙田正光さん 35
(5) 高岡市立博労小学校／谷口徹さん 39
(6) 静岡市立高等学校／寺田仁さん 43
(7) 金沢市立港中学校／中谷司さん 47
(8) 三重県立白子高等学校／花房範子さん 51
(9) 名古屋市立自由ヶ丘小学校／松川弥生さん 59
(10) 島田市立島田第三小学校／渡邊三知子さん 63

● マラウイコース研修参加者

(11) 金沢市立大徳小学校／今井由美子さん 68
(12) 八尾町立杉原小学校／岩脇達典さん 72
(13) 津島市立西小学校／賀島美恵子さん 77
(14) 名古屋市立長須賀小学校／金森美津子さん 82
(15) 石川県立金沢中央高等学校／河上康一さん 87
(16) 岐阜県立恵那農業高等学校／木村友美さん 91
(17) 武豊町立武豊小学校／榊原喜子さん 95
(18) 名古屋市立中央高等学校／鈴木富雄さん 100
(19) 私立光ヶ丘女子高等学校／田中千賀子さん 104
(20) 静岡県立富士養護学校／田邊愉美子さん 111
(21) 伊勢市立宮川中学校／中津俊彦さん 122
(22) 金沢市立兼六中学校／福島直美さん 127
(23) 鯖江市立吉川小学校／松山純子さん 131
(24) 三重県立桑名高等学校／水野悟さん 135

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月　日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	岐阜県羽島市立竹鼻中学校	氏　名	上手　留実子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- いろいろな人びと（ガーナ人、ガーナで働く日本人、今回の研修を共にする仲間）の生き方から、「幸せな生き方とは」どういったものかを考える。
- 現地での視察を通して、ガーナ（開発途上国）の生活や文化・歴史・自然などについての認識を深める。
- いろいろな人や物のつながりを知り、今後、同じ地球市民として共生していく上での課題（支援のあり方）などを探るきっかけをつかむ。
- ガーナと日本を比較する中で、今後我々が大切にしなければならないことは何なのかを考える。
- ガーナ研修への積極的参加の姿勢を今後の教育現場でも維持し、特に開発教育（自己開発）をいかに現場の学習につなげていくかを考える。

1－2．その目的やねらいの達成度

- 短い期間ではあったが、本当に多くの人びととの交流の場を与えられ、これまでに自分の知らなかった世界のことをいろいろと聞くことができた。中でも苦労したことや生きがいについてのお話は、私自身の生き方の世界を広げてくれたと思う。さらにコミュニケーションを積極的に図れるようになりたいと思った。
- これまではほとんど知らなかったガーナでの研修を通して、「こんなところもあったのか」とか、「そんなつながりがあったのか」という発見がいくつもあった。ガーナについてはもちろん、さらに今後においてはいろいろな地域について学びたいと思ったし、身近な世界のことにも目を向けなければと思えてきた。
- 日本が行っていることの実態を少しだけ学べたことから、まだまだ知らないことがたくさんあることを知ることができた。ということで、これをきっかけにして学びを深めていきたい。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- ガーナの人々は、何処へ行っても本当に友好的で我々日本人を大歓迎してくれて嬉しかった。その裏には、ＪＩＣＡやＮＧＯで働く方のこれまでの貢献があったことが分かった。
- ガーナの子どもたちは勉強したいと強く願っていることが分かったが、その結果として、高等教育を受けてエリートとなった者は自分の利益を求めて海外へ出ていくことが極めて多いということも分かった。
- ガーナでは子どもたちも働くことを当然のこととして受け止めている。忍耐力とか適応力が育っている。
- 蛇口をひねれば水道から水が出ること、スイッチを入れれば電気が点くことなどが当たり前ではない世界もあるが、そこに暮らす人々は決して不幸ではないことに気づいた。
- 支援はその出口をしっかりと見極めて、現地の人々やそこに関わる支援団体が協力しあうことが大切。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- ＪＩＣＡ中部の皆様が、今回の研修に私のような高齢者でも選んでくれたことが嬉しかった。
- ＮＩＥＤの山中さんや川合さんには、今回の海外研修では「少しでも我々の研修が実り多きものになるように」と、学びノートを始め、細かい点までご配慮いただいて、おかげで観光旅行に終わらせることなく、少しは「研修」という点に頭を持っていけてありがたかった。

- ＪＩＣＡガーナ事務所の方々も事前の準備から研修の最中（２４時間態勢で対応して下さったとのこと)、少しでも我々の研修が充実したものになるように動いてくださり、感謝・感謝で一杯だった。
- 参加者から（伴さんや稲生さんからも）はいろいろなお話しが聞けたことや、細かい気遣いをしていただけてありがたかった。

３．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

- 青年海外協力隊を始め、現地で働く日本人の方々の生き方を、今後の進路指導につなげる。
- 本やインターネットで得た情報よりも実体験の中でつかむ学びには深いものがあることを特別活動に生かす
- ガーナの生活や文化の紹介により、さらにいろいろな地域についての興味関心を呼び起こすことにつなげる。
- ガーナの中にもいろいろな生活や文化が見られるように、知らない地域や人びとのことを画一的に見てはいけないことや偏見を持って見てはいけないことを国際理解学習の展開につなげる。
- ガーナで展開されるＪＩＣＡ事業で学んだことを、「支援のあり方」について考えるきっかけにつなげる。

４．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

- 今回訪問させていただけた事業所のどこに行っても、協力隊の方々や専門家の方々が周りの人々に大変好評を得ていることがよく分かった。我々の知らないところでも、多くの日本人が日本とその国をつなぐ、いや世界のいろいろな地域や人々をつなぐ橋渡し役を担っておられることに感銘した。
- 国づくりは人づくりからと言われるように、まずはそこに生きる人びとが自分たちの地域や国を大切にしていこうとする気持ちを育てることが大切。しかし、優秀な人材は海外へ流出していってしまうのが現状。そこで、ガーナという国に誇りや希望を持たせるような教育を施す必要がある。そのためには優秀な人材をガーナに残すような対策を立てて欲しい。

５．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

- 事前研修からずっと、スタッフの方々が時間とお金をかけてこの研修の企画や運営をして下さったのがよく分かった。おかげでガーナでの研修は、どこのどの場面も得るものがあって有意義だった。個人旅行では決して行けないところも数多く視察させていただけて本当にありがたかった。
- 協力隊の方々は地域に根ざした活動を展開されてみえたが、我々も何か１つでもガーナのみなさんに伝えられるもの、残せるものがあるとよかった。それは単に「物」ではなく、「物がなくても残るもの」という意味で。我々の行った交流は、単に日本をうらやましく思う気持ちを残しただけではないかと自省する面がある。支援のあり方と同じように、交流のあり方の事前研修もあった方が良かった。
- 今回も役割分担や研修内容について十分に確認されていたはずだったが、実際に研修が進む中では「誰が中心となって何をすべきなのか？」が不明確な点が多くあった。事前にその点をしっかりと把握できるといい。

６．その他全般を通じての感想・意見など

- 計画通りにことが進まなかったりしたことで、もっとスケジュールを簡素化したらどうかという意見もあったが、はるばる遠い所まで出かけていってまでゆとりの時間はもったいない。今回のような日程のおかげでいろいろな研修ができ、心打たれる経験もできたのでよかったと思っている。（やや贅沢過ぎたかも・・・）
- とにかく体力的に無事に行って帰ってこれるかどうかが一番の課題だった私に対して、スタッフの方々、参加者の方々（伴さん、稲生さん)、職場の方々、その他にも多くの方々に支えていただけたことに感謝したい。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	さすがガーナ経済の中核となるココア輸出の出荷場だけあって大型トラックに山と積まれたココアがあった。１袋６４ｋｇもあるというココアの袋をみな人力で積み降ろししていたが大変な重労働だ。そのココア豆の中でも良質の物が先進国へ送られて高額なチョコレートに加工されるとか。カカオ農園で見た生産者の利益と比較するのがおぞましい
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA 事務所訪問	大使館やガーナ事務所で働く日本人の方々はみな、ガーナを第二の祖国のように愛し、そこに暮らす人々が自立して経済発展を遂げることを願っていることが分かった。みなさん明るく、たくましく、かつ冷静沈着。小渕さんが言われた「国づくり＝人づくり、現地に根付く活動を目指したい」という思いをみなさんから共通して感じた。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	日本人が中心となって指導を入れ、５年間で１チームから２４チームの野球チームに広げたことを誇らしく語ってくださった山口さん。そんな山口さんへの信頼関係から、チームのみなさんは我々に大変友好的だった。交流ゲームを通しても、スポーツを通じて通い合うものがあることを実感した。言語以外での交流の場も今後考えてみたい。
	JICA 専門家・隊員との交流 （8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	ＪＩＣＡ関係者のみなさんに共通することとして「未知なる世界での開拓（それは自分自身の開拓も含めて）に自分の可能性をかけている」というような面を感じた。また思いだけに留めることなく、それを実行に移している意志の強さも感じた。そういった生き方を、日本の中においても実現できないものかを生徒と共に考えたい。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	植物園や滝の見学では、「ガーナにもこんな素敵な場所があるんだ。」と感心した。が、数少ない絵葉書の写真にも載っていたことから、ガーナではこういった場所は極わずかであることも実感した。アコソンボダムの完成によりガーナの電力は主にここで作られているようだが、今後の電力の需要の拡大に対しての対策はどうなっているのか疑問が残る。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	バスで移動する途中の車窓から見たいくつもの部落の小学校に比べて、ここの高校の概観はまずまずだと思った。しかし教室の使いにくそうな黒板を始めとする環境やテストを刷る古い印刷機などを見て、まだまだ学習環境の遅れを感じる。しかしそんな中でも、小浜隊員の活躍ぶりが、周りの人たちの言動から読み取れて嬉しかった。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	１時間以上も遅れた我々を待っていてくれた生徒たちだったが、とてもフレンドリーだった。異文化に対する興味もあってか、我々の話を聞く時の集中力は素晴らしかった。その場に応じた反応もよく対応力があった。それを嬉しそうに観ていた広瀬隊員の姿も印象的だった。ここも教育物資は乏しいが、「心の豊かさ」のようなものを感じさせられた。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	ＪＩＣＡ事務所の小淵次長さんから、ガーナの先生のレベルの低さ（１０－２＋３ができない教員が７割もいる）を聞いていたので、まずはそんな先生たちに対する研修の機会の場を与えることを試みたことはいいことだと思った。しかし教育に関する重要性を真に国が重視しなければ、教員を希望する人の質も高まらず、根本的な解決にはならない。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	訪問した学校はガーナの中では恵まれた学校と聞いたが、それでも参観させてもらった理科のプレ授業の中で使われていた道具はお粗末なものであり、授業そのものも教師主導で覇気がなかった。それでも生徒たちとは日本の遊びで交流を深めていくうちに、打ち解けた雰囲気になった。が、どんな交流が望ましいかは今後の課題である。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	丹さんやメアリーさんの案内のおかげで、今回の研修の中でも一番と言っていいほど内容の濃い研修となった。地元の人たちとのつながりの深いＮＧＯの活動にＪＩＣＡが資金援助して協賛の形を取ることで１つのプロジェクトを成功に導いていた。乳児の死亡率の低下などすごい実績をあげていた。いろいろな組織の協賛による成功を教育現場にも。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	田村さんの案内で、短時間ではあったがガーナの悲惨な歴史の一部を垣間見ることができた。とりわけケープコースト城の中で、実際に奴隷になった人たちが大勢監禁されていた洞窟のような部屋を見て、心が締め付けられるような思いがした。本で読んではいたものの、やはり実際に現場に立つと、心にのしかかるものの重みが違うと感じた。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	日本でいうところの専門学校と国立高専がミックスされたような学校だったがここでも設備不足は感じられた。しかし半田さんの「もうすでに支援は十分にしてもらっているのだから、今ある環境で精一杯やれることを考えさせたい。」という言葉が印象的だった。自分の存在場所の確認ができたという半田さんのように、日本の中でも見つけさせたい
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	いつもバスの車窓から眺める景色は昔からの原野がそのまま開拓されず野放しになっている自然だった。そんな中で初めて見た灌漑農業の現場は日本の稲作に近いものがあった。そこで働いてきた清治さんのお話から、水がないと日本のような農業ができないことが分かった。山のほとんどないガーナでの農業開発はなかなか困難であることを知った。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	３１日にヤオさんに案内してもらったアクラの街中のマーケットはものすごい物と人とであふれていた。が、アクラの中でも外国人たちの生活するような場所は大変整備されていて、日本と大差がない。アクラ１つをとっても一言では語れない。野口研究室には２回行ったが、ガーナに住む日本人にとっての最も誇りの場所の１つであると感じた。
行き帰り	名古屋⟷成田⟷ロンドン⟷アクラの行き帰り	ロンドンまででも結構な距離であるところを、さらにそこから半日以上かかるガーナは随分遠い遠い国であると感じた。そんなに遠くまで自分が行けるか、またこんな自分をいろいろな人たちが受け入れてくれるだろうかと不安で一杯だった。が、２日かけての移動がそんなに苦痛ではなく、返って新たな発見もあって楽しかった。ロンドン泊もよかった。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	バスでの移動時間が多くあった中、丹さんや田村さんのような現地の現状に関するお話を聞かせていただけたことで研修が２倍充実したものになった。ガーナの人々は本当に人がいい。が、仕事への厳しさという点ではルーズな面がある。その点、日本人の勤勉さを改めて発見することもできた。子どもたちの姿にしても、小さい頃からの生活の中で身につけた几帳面さが日本の子どもたちにはあることを発見。しかし一方で日々の生活を時間に追われる日本人にとって、ガーナ人のようなおおらかさ（時間に対しても）も時には必要かもと思った。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月19日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	愛知県立豊田東高等学校	氏　名	高野純子

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

・ ガーナがどんな国であるのか、人々の暮らし、町や村の様子、学校の様子を実際に自分が知る。

・ ＪＩＣＡの援助活動の実態を知り、なぜ私達は海外援助するのか、どんなことができるかを考える。

1－2．その目的やねらいの達成度

・ 私にとって未知の国であったガーナの人々の生活について表面的ながらも知ることができた。

・ 援助活動には様々な内容があることを知った。なぜ私たちは海外援助するのか、を生徒とともに考えていきたい。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

・日本のあらゆる面で効率の良い社会と比べると、ガーナはのんびりした社会であるように感じられたが、人々の笑顔が素晴らしかった。また、人々が堂々としていた。子どもでも、威厳を感じさせた。

・都市と村の間の格差が大きい。インフラ整備が必要である。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

・研修参加者が、たくさん見て、聞いて、感じて、食べて、何でも経験したいという方ばかりだったので、お互いに見て感じた事を話し合い、刺激的だった。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

・私達が無意識に持っているステレオタイプが正しくない事、貧富の差はあっても、どんな国でも、日々の暮らし中で、人々が笑い悲しみ、労働にいそしみ、家族を大切にする、普通の生活があることを生徒に伝える。そして、ガーナの人々の豊かな生活、自殺者のいない社会、たくましく生きていく姿を生徒に伝えたい。また、いろいろな世界、生き方があることを伝える事を通して、生徒の視野を広げたい。

・生徒に、各地で活躍するＪＩＣＡの方の活動を、写真やビデオで伝える。そして、何故私達は援助するのか、どんな援助が有効だと思うか、各自で今後何が出来るか考えるきっかけにしたい。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

・各協力隊員や専門家、調整員の方々が、現地に溶け込んで、現地の人といっしょになって、ガーナのために働いている姿に感動した。それぞれの援助活動がうまくいっているのは、お互いの間にまず信頼関係が生まれているからだと思った。

・「国づくりは、人づくりである。」という小渕次長の言葉に感銘を受けただけに、ガーナにおける頭脳流出の問題は深刻であると感じた。ポリテクで先生方が学校のレベルを上げる努力をしておられる姿に、同じ教育に携わるものとして感動したが、その一方で、教育のレベルが上がれば上がるほど、さらに頭脳流出してしまう矛盾を感じた。何故日本であまり頭脳流出が起こらなかったのか、帰ってきたときの地位の保証だけでなく、「滅私奉公」のような考え方を教育の場で植え付けてきた事も大きいのだろうか、などといろいろと考えさせられた。

・観光面での支援（例えば、レストランやホテルでのサービス向上について日本で研修を受けるなど）が必要であるように感じた。レストランで注文してから、１時間以上もたって料理の品が来たり、注文と違う品が来たり、後からきた人の品が先に来たりする事がよくあった。また、ホテルも突然キャンセルされる事があった。よけいなおせっかいかも知れないが、せめて、外国人が利用する観光地のレストラン・ホテルだけででもサービスをよくしないと、せっかくの客が逃げてしまい、リピーターを作り出せないのではないか、と思った。

・（応募人数と現地で必要とされる人数のバランスの関係だと思うのですが、）教員の協力隊員の方が、日本ではかならずしも教員ではないことに少し驚いた。日本の各小・中・高では研修で、よりよい効果的な教授法や教材について日々研究され、変化しているので、それを生かすことができたらいいと思った。

５．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

・全くガーナについて知らなかったが、ガーナの人々の生活を多少なりとも見聞きし、日本とのつながりを知り、援助の実態を知ることができ、本当に充実した素晴らしい研修だった。自分の視野が広がったように感じられた。

・事前研修の中で、現地で行なわれているＪＩＣＡ事業について、事前に資料は配られましたが、できれば講義形式で説明して欲しい。せっかく現地を訪問しても、事業そのものの説明、及び簡単な質疑応答に終始してしまったところがある。予め出来るだけたくさんの情報を出発前に入手しておけば、説明を聞いた時には分からない事でも、現地に行ってはじめて理解したり、繋がって見えてくるものがでてくる。また、より深く質問できたと思う。

・事前研修の中で、協力隊員に持っていくおみやげや、現地交流で何をするか等、についての話し合いの時間を確保して欲しい。

・現地研修では、出来るだけ、情報を集める事が大切だと思ったので、可能な限り、現地での移動のバスにＪＩＣＡの現地スタッフや専門員など、現地のことをよく知っている方に同乗していただけると、いろいろと質問できてありがたい。

・現地研修は、できるだけ、１８時ごろまでにその日の研修を終えるようプログラムを組んで欲しい。そうすれば、夕食を交えながら、研修参加者同士で、その日を振り返り話し合い、またどんな授業展開、授業方法があるかを話しあうことができると思う。また各自部屋で自分なりに考えをまとめて書く時間も確保できると思う。（実際は、現地の実情に合わせるので、難しいと思いますが。）

６．その他全般を通じての感想・意見など

・　ＪＩＣＡの活動にかかわる人々のきっかけをきいたり、高知県の葉山村の子供たちをみて、感動すると同時に、学校教育の持つ可能性・影響力に改めて考えさせられた。

・ この研修の魅力は、訪問国を知ること、ＪＩＣＡの援助活動を知ることだけではなく、普段の生活ではなかなか会う機会のない様々な分野の人々に出会い、お互いに情報交換し、意見をかわし、考えていくところにあると思う。また、そういう意味で、例年と違い小・中・高の教員が一緒に行動することは、大変刺激的だった。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	ココアはガーナの３大輸出品のひとつであるが、収穫、輸出選別、出荷に至る一連の作業のほとんどすべてが人力で行われている。ガーナ国内では高度な精練技術を持った工場がないため、ココア豆の状態で高品質のものが、安くヨーロッパや日本へ輸出されていく。 →農産物輸出国の実態を通して、またガーナチョコと日本のチョコの味、値段の違いを通して、高い技術を持った先進国と原産物輸出に頼る発展途上国との関係、について考えさせたい。オートメーション化と雇用確保の関係について考えさせたい。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	「国づくりとは、人づくりである」ということを教育の重要性を政府レベルでは、認識しつつ、予算不足から教室・教科書・教師を確保できない現実。「１０－２＋３＝？」の問題を７０％の高校教員が正しく答えられない。また、地方では授業に現れない教員が５０％もいる高校もある。ガーナをこれからの西アフリカ諸国の中のリーダー国として、重要視していること。 →教育が果たす役割を生徒に考えさせ、なぜ、私たちは学校で勉強するのかを考えさせる。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	→サッカーが盛んな国で、なぜ野球なのか。スポーツが、援助活動とどう結びついてくるか、を考えさせる。（私自身は、よくわかりませんでした。）
	JICA専門家・隊員との交流 （8/6JICA関係者との懇親会を含む）	「去年来た葉山中学校の生徒の中から将来看護婦や、協力隊を目指してがんばる生徒がでた。」という小渕次長の言葉に、学校教育の果たす役割の１つの理想の姿を見る思いがした。 →生徒に様々な知識や考え方、生き方を示し、今後どう生きていくか、を考えるきっかけをできるだけたくさん提供する。 シニア協力隊員の方が「教育で底を１センチ上げることは、ものすごく大変である。」とくり返しおっしゃっていたが同感であった。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	温暖気候の植生とはまったく違う熱帯（？サバンナ？）の植生について。アコソンボダムのおかげで、電力を隣国に輸出できる位発電しているが、国内電気普及率は２０％である。 →インフラが整備されることの意味を、生徒に実感させる。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	ケジェビの高校の抱える問題について。学校の１年間のカリキュラム。試験制度について。 →よりよい教育活動を行うためには、十分な予算が必要であること、を生徒（もしくは教員）に伝える。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	子供の可愛さ。 →たくさんの写真をつかって、ガーナの高校生と日本の高校生の違いと同じ所を伝え、優劣でなく、差異があることを伝える。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	紙も十分にない施設にパソコンが３０台設置されていたが、指導者不在のため現在は使われていない。ＳＴＭは、生徒自身に考えさせる授業を行うことも目標にしているが、教員の資質向上、教科書の全員無料配布も最優先課題ではないだろうか。 →その国の現状に合った援助とは、何かを考えさせる。
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	小学校の授業で、生徒は純真で学ぶ意欲も十分にあるが、教員が教科書や黒板をほとんど使わないこと、生徒全員がノートや教科書を持っているわけではない（紙が無い）こと、など教育環境が不十分である。 →生徒にインタビューしたビデオを通して、海外の生徒の将来の夢を伝え、生徒自身に将来の夢、なぜ勉強するのか、なぜ学校へ行くのかを考えさせる。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	現地のＮＧＯ活動に対して、ＪＩＣＡが資金援助する形態を取っている。お互いの信頼関係が成り立っていることが、援助活動が成功する秘訣ではないかと、改めて思った。母子手帳や手洗いの奨励、ＨＩＶに関する知識の普及が、死亡率低下につながってくる。 →具体的に保健総合改善プログラムの内容を説明し、命を守るとはどういうことかを考えさせる。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	奴隷貿易の実態について。 →世界史に記述されている内容をより深く伝える。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	物資が無いことから、毎日の教育活動を効果的に行うことができない。生徒は政府に対し、就職先での差別をなくすようにスト中。「物が無いことを嘆いても仕方がない。あるもので毎日の授業を工夫している。」という半田隊員の言葉に感銘を受けた。ただ、学校のレベルを上げても就職先が十分に無ければ、勉強する目標が無い、という現実もある。 →ポリテクの現状を生徒に話し、自分がポリテクの生徒だったらどうするか、どんな援助が学校に対して必要・有効だと思うか、考えさせる。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	安定した食料生産をめざして始まった事業。清治専門員と地元の農民との間の深い信頼関係がるからこそ、うまくいっている。適地・水源不足・降雨量不足のために思うように灌漑農業が発展しない。 →農業と自然の関係について考えさせる。現地に合った農業振興計画とはなにか、を考えさせる。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	→ガーナの人々の生活について、写真で伝える。特に色彩豊かな女性のファッションや背中に子供を背負う女性、都市に住む人は携帯電話を持っていること、などを通して、生徒が持っているガーナ人（アフリカの人）に対するステレオタイプが間違っていることを実感させる。
行き帰り	名古屋⟷成田⟷ロンドン⟷アクラの行き帰り	日本人が中心の名古屋と、様々な人種が集まっているとはいえ白人が中心のロンドン、黒人が中心のアクラで、状況が変わるとどう自分が感じたか。 初めてアクラの空港で、ガーナ人の集団を見たときと、１０日間過ごした後で、見たときの、自分の感じ方の違い。 圧倒的に富と技術が集中したロンドンで、ガーナが抱える頭脳流出の問題の奥深さをあらためて感じた。 ロンドンの空港では、様々な人種の入国審査官がいたこと。ガーナではたくさんの民族があり、国民意識より民族意識のほうが高いこと。民族間では言葉が通じないので英語を使うこと。以上からのことから、日本では基本的には日本人＝日本語＝日本国民の構図になっているが、世界全体からみるとそれが極めて珍しいことに改めて気付かされた。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面 （様々な場所で出会った人々）	ヨシケントラベルの田村氏の精力的で何事にも前向きに物事に取り組んでいく姿に、本当に感銘をうけた。またシニアボランティアの方の存在を知ると、後に続く者もがんばろうという気持ちになった。 またＪＩＣＡ職員の援助活動に対する熱い思い、協力隊員の様々な経験を伝えることで、生徒にとって、人が生きている数だけ様々な生き方があることを知る、自分を大切にして今後どう生きていくかを考えていく、そして世界に視野を広げて他人のことも考えていくことのきっかけつくりになればよいと思う。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月19日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	津幡町立条南小学校	氏　名	坂本　久美

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

（1）　ガーナでのＪＩＣＡ開発援助事業の視察を通して訪問国に学ぶ。

（2）　ガーナの協力隊員、現地の人との直接交流を通して多様な人に学ぶ。
特に協力隊員の現地での苦労や喜びから生き方を学ぶ。

（3）　ガーナの自然、都市、歴史、文化に直接触れ、訪問国の背景を考える。

（4）　訪問国から学んだことを通して、日本をふりかえる。

1－2．その目的やねらいの達成度

上記（1）においては、STM(理数科教育改善計画)視察でガーナの教育事情が、PPAG（地域保健総合改善プロジェククト）では巡回先の村の様子、灌漑小規模農業振興計画ではガーナでの稲作農業の実態を知ることができた。

（2）では、協力隊員（野球、理数科教師、デザイン）を訪問して活動している場所を見学させていただいたり、直接話をお聞きすることができた。また、専門家や調整員の方々とも話す機会があってよかった。現地の方に関しては、教員ということで学校の先生や職員の方に説明を聞くことができ、ガーナの教育事情を知ることができた。ただ、ガーナのふだんの暮らしには直接触れることができなかったように思う。

（3）では、特色のある場所ということで、野口英世記念館、カカオ農園や出荷場、ケープコースト城、エルミナ城を見学して、現在のガーナ、かつてのガーナを理解する上で非常に役に立った。

（4）では、視察や交流、また宿泊ホテルや食事場所において、常に日本と比較して考えることができた。

こう振り返ると、この研修は内容が豊富にセッティングされていて、上記（1）～（4）はかなり達成で達成できたと思う。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

渡航前の私のイメージは「ガーナは赤道に近いからすごく暑い国だろう。」「暑い国だから人々はのんびりしていて昼寝をしている。」「野生動物がたくさんいる。」「途上国だから村には学校がない。」等であったが、そのガーナのイメージが次々と破壊されていった。来てみると、雨季で気温は２７度前後。日本の夏よりははるかに過ごしやすい。朝早くから一生懸命働く姿が見られる。小さいほうきでよく庭をはいている、多くの家で洗濯物が干されている様子。緑いっぱいの中で、とうもろこし畑が続いている様子。サバンナではないからライオンはいない。義務教育の無償化、義務化で小さな村にもちゃんと学校がある。アフリカが一つの国であるように考えている子どものことを笑えないのだ。自分の目で見る、体験してみることがいかに大切かを身にしみて感じた。そしてある種の偏見ももっていたことに気づき恥ずかしい思いでいっぱいである。

しかし、ガーナでは学校はあるといっても入れ物だけのようで、教材教具が不足しているのは事実のようだし、聞くところによると、ガーナの教員の給料は安くステータスは低いそうだ。資質向上のための研修もなかったとのこと。また３年間教職につくと有給進学が認められ、大学で勉強でき、学位取得後は同じ教職（レベル）に留まらないらしい。それは小学校より中学校の教員に多い傾向だそうだ。せっかく育てても現場に往かされないという実態である。それは教員に限らず、医者でもそうらしい。頭脳の流出を食い止める施策が必要だと思われた。

また、いたるところに物干し竿のようなサッカーゴールをよく見かけ、子どもたちが小さいころから、サッカーに親しんでいるということがよく理解できる。スポーツ予算の９割がサッカーにいくそうだ。

視察した範囲のことしか言えないが、ガーナという国は都会と田舎、貧富の差はかなりあるが、貧しいといっても、熱帯性気候で１年中果物やイモ類がとれて贅沢をしなければどうにか食べていける国のようだ。電気がなければ、お日様と共に生活すればよいのだし、水がなければくんでくればよい。確かにそれは大変なことではあるが、地球に優しい生活なのではないか。子どもも含めてお互いが助け合い、娯楽がない分、人々が集まり、コミュニケーションをはかる。自殺もないそうだ。日本はというと夜もあかあかと電気がつき、水は蛇口をひねるといつでも安全な水が出て、交通機関も発達したすばらしい国である。人々は次々と便利なものを手に入れ、物があふれている。でもそこまで多くの資源を使い、ぜいたくな暮らしをしていることがよいことなのだろうか。物が豊かな分、心が豊かかと言ったら反対のような気がする。少しくらい不便なことがあったほうが、人と人とのつながりが強くなり、環境にも優しいのではないだろうかと考えさせられた。

２－２．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

協力隊員はみんな地元の人と同じ生活をしているとのことに驚いた。３１日の交流会で隣になった新谷さんは地元の人が利用しているトロトロというバスを乗り継いで、８時間もかかってアクラまでやってきたそうだ。もちろんマラリアにもすでにかかったとのこと。水道がないからシャワーはコップの水をかけていることや昼はバナナ５本を食べるだけというのにも感心してしまった。地元の人と同じ苦労をしてこそ、その地域で受け入れられるのだろう。どの隊員もそんな苦労は言っても仕方のないこととして、みんな前向きでがんばっている。私には真似ができないことであり、ただただ隊員の方々の健闘を祈るのみである。

また、ポリテクに行って、半田さんが隊員になった理由を聞くと、小学生の時、社会の教科書に青年海外協力隊の話が出ていてすばらしいなあと思い、自分もなりたいと思ったという。そして大人になって会社に勤めて行き詰まりを感じた時、子どもの頃の夢を思い出して、応募したとのこと。そこに教育のすばらしさを感じるとともに、隊員というのは途上国の人々を助けているようで助けられている面もあるのではないだろうかと感じた。日本で生きづらさを感じた人の拠りどころにもなっているのではないか。途上国では自分がもっているものを生かして人の役に立つことができるという生きがいを見いだすことでできるのだ。専門家や調整員の方の多くも元隊員であることからして、現地では少数派でがんばってきた人が、日本に帰ると多数派として埋没し生きがいが見いだせなくてまた途上国にやってくるのではないのだろうかと思った。

3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

児童も私が２－１で書いた渡航前のイメージとほとんど同じイメージをもっていると思われるので、撮ってきた写真を使って、フォトランゲージでガーナの情報を読みとらせたい。そして読みとった情報を補強する形で、見てきた範囲ではあるが実際のガーナの姿を知らせることにする。自分の目で見ることがいかに大事か分かってもらえると思う。そして日本と比較することでまず自分の住む国に誇りをもってほしい。そこから次のステップが見えてくるのではないかと考える。

また、ここでは青年海外協力隊の方を抜きにはできない。なぜ隊員になったのか、どんな仕事をしているのか、どんな思いで働いているのか、インタビューしてきた映像から生き方を学ばせたい。児童が興味をもったなら、実際に石川県在住の元隊員に来ていただいてお話を聞かせてもらおうと思っている。そこでは援助することの難しさも出てくるに違いない。人づくりの喜び、難しさも聞かせていただけるとありがたい。援助はお金だけでなく、人づくりが大切なことに気づいてくれることを期待する。

4. ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察ではガーナの教育現場の現状を知ることができた。また、ＰＰＡＧ（地域保健総合改善プロジェクト）では、草の根レベルでの家族計画、母子保健サービスの普及、栄養改善、環境衛生等の活動を視察することができたし、小規模灌漑農業振興計画でも地元の農家の人々とともに天候に左右されない水田作り、施設の運営維持管理に関わっていることが分かり、どれも地元の人々の願いに基づいて地元の人々と共に活動して、成果をあげていることがすばらしいと思った。こういうことが実を結び、どんどん広がっていくことを期待する。そして何よりガーナ政府が自分たちの問題点に気づき、国として本格的に取り組んでいってもらいたいものだと思った。

5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

前にも書いたが、ガーナは日本から遠く離れた地であるだけに、抱いていたイメージがくずされることが多かった。首都アクラのホテルでは先進国を感じ、そこからちょっと出ると生活の様子が一変し、まさしく途上国を感じさせる。実際に行ってみて自分の目で見ることの大切さがわかり、とても有意義な研修となった。事前研修でガーナについての多くの知識を教えられなかったのがよかったのだと思う。

私の学校では国際理解教育にそれほど力を入れていないし、私自身担当ではないので、学期に１回、国際交流員の方と触れ合って、英語に親しんだり、外国の文化を教えてもらったりする程度にしか考えていなかったので、この研修に参加したことで、国際理解教育は、それだけに終わらず、自分たちの生活とのつながりの中で、人類共通の課題を考え、解決する方法を考える主体を育む教育だと分かった。これから事前研修等で教えていただいたアクテビティ等を利用して開発教育に取り組んでいきたいと思う。

ただ、参加型ワークショップは次から次とお題が出され、息つく暇がない。ファシリテーターの誘導にのせられて考えていくしかないような息苦しさを感じた。それは私の勉強不足のせいなのかもしれないが、それとなくレールに乗せられて国際理解教育の概念を学んでいき、行き着く先は同じことを何度もしているように感

じた。参加者が次はこれを考えたいという融通性がもう少しあってもよいのではないかと思う。

6．その他全般を通じての感想・意見など

来たからには多くを学びたいと思うが、夕方６時前にはホテルに着けるようにしてほしい。そうすれば、その日のうちに体験したことを参加者同士が交流できる時間ができると思う。アクティビティという形でなく、気軽にその日学んだことや思ったことを話し合う時間にしてほしい。

また、教員ということで学校訪問が入っていてよかったが、一般家庭も訪問してガーナの暮らしに触れてみたかった。マーケットは歩いたが、ガイドさんの後を追うように歩いただけで、市内を歩くこともなかったのがとても残念であった。でも、現地の事情もありから、予定通りに行かないこともある。今回、研修の内容をいろいろと考えてコーディネートしてくださったことに感謝します。有り難うございました。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	カカオは１袋６４ｋｇ。１台のトラックに２００袋積んでくる。それを１６人の人の手によって２時間で倉庫に運び込む。１袋１万円なので２００万円農家に支払うという。運ばれた豆袋には防虫スプレーをして５日後に輸出。ここでは豆の選別もきちんとしていた。ガーナではカカオの品質管理をしっかりしていると思った。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	初めての大使館訪問でやや緊張したが、大使が気さくな方で安心した。大使館公邸にも招かれることになった。厳重なセキュリティであった。 ガーナ教育省は政策を立て、ＧＥＳは教育省の予算の８割を遣い実行にうつす。就学率は小中学校８割、高校６割、大学１２～１６％とのこと。高校卒業時にＳＳＳＧという試験を受けて、大学が決まる。先生のステータスは低い。理数科の指導力も低いようだ。 ＪＩＣＡ事務所ではガーナ服の小淵次長から高校の教育現場における興味深い話を聞くことができた。ガーナの高校の理数科教員の意識やレベルが分かった。また、神谷調整員、大熊健康管理員からはガーナ滞在における注意点や健康面でのアドバイスをいただき、行き届いた心遣いに感謝したい。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	日本から遠いガーナで野球の指導をしていて苦労はないかとのことに前任者のお陰で道はついているとのことだが、時間やグラウンド整備など礼儀から教える必要があるとのこと。野球センスはよいので小さい頃から野球に親しめるとよい。だが、スポーツ予算の９５％がサッカーにいく。ナショナルチームは今年西アフリカ大会に勝ったが、お金がなくて次の大会に出られなかったとのことだった。用具はアメリカや日本からの寄贈だそうだ。１１歳の野球少年がいたのでインタビューした。彼はスパイクを盗られたとのことでサンダル履きであった。 私たち参加者も野球に参加させてもらった。下手なのが分かって手加減してくれたお陰で楽むことができた。言葉が通じなくてもスポーツで交流でき、改めてスポーツのよさを感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
	JICA 専門家・隊員との交流 （8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	左に座っていた松田さんはＧＥＳ副総裁の通訳をしていたが、教育省所属とのこと。マラリアにはかからないが、自宅に強盗が入ったとか。右に座っていたのが、新谷隊員。ドディパパセ高校の理数科教員。トロトロを乗り継いで、８時間もかかってアクラにやってきたとのこと。食事は朝は現地の赤飯、昼はバナナ５本、夜は現地の先生が作ってくれた料理を食べているとのこと。他にもコップの水でシャワーをしていること、生徒は先生に絶対服従で、水汲みもしてくれるとのことを聞いた。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	植物園は２万セディ。よく管理されていた。ここで初めて本物のカカオの木を見て、実が幹から直接出ていることに全員驚きの声をあげた。昼食場所周辺で水を売る１２歳の少年と話す。毎日４０袋売っているそうだ。 アコソンボダムを建設するために２００万人もが移住したそうだ。発電された電気はトーゴ、ベナン、ブルキナファソにも供給しているとのこと。遊覧船が戻ってきた。９万セディで、１０時から１６時まで。 フリーダムホテルでは、ウォーターヒーターのない部屋で、初めて水シャワーを体験。それほど寒くなかった。部屋の電気は薄暗く老眼では何も読めない。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	ガイドの方の勘違いで出発が１時間遅れ、さらに道を間違えたのか、計２時間も遅れて到着。ケジェビの先生方を待たせるという迷惑をかけてしまった。本校は１９５９年創立で、現在８２９人の生徒数。テスト期間ということで、授業風景は見ることができなかったが、副校長先生から高校の様子をうかがうことができた。通学生と寮生がいる。寮が不足しているとのこと。女子寮を見せていただいたが、１部屋に２０人も入っていてプライバシーがないようだ。生徒は忘れ物をしたら帰ってしまったり、本を貸しても返さなかったりするらしい。卒業試験の結果で進路が決まる。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	ここも１３時訪問予定が１５時になってしまったが、２００人くらいの全校生徒が待っていてくれていた。参加者が日本紹介をすると真剣に聞いていた。ヨーヨーやけん玉の披露が終わって、それに加えて大縄やあやとりで交流した。大縄では私たちの回し方が遅かったらしく自分達ですごい速さで回していた。リズム感がとてもよいが、縄から出るのは苦手らしい。交流に時間がかかったので、広瀬隊員とは話す時間がなかった。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	初めにアクアピンノース郡の教育局を訪問。女性の教育長にお話を伺う。次に役所訪問。水から保健のことまですべてのプロジェクトをするそうだ。議員に会うが元先生が多いと知る。これも先生のステータスが低いせい？ 授業参観の後になったが、大原専門家よりＳＴＭプロジェクトについてお話を伺う。現職教員研修の制度化では、まず、学校の実態調査をして、校長の研修（マネージメントの強化）をするそうだ。ガーナでは生徒は先生に絶対服従だが、子ども中心の授業をしていこうと働きかけているらしい。ただ研修にもお金がかかるため、日本が援助しているとのこと。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	プレスビテリアン教師訓練校校長訪問。この学校は１８４８年に創立。ガーナ初で、西アフリカでも２番目に古いとのこと。歴代の校長先生の写真が飾ってあった。エンブレムには"That all may be one"と記されてる。学生は１９５０人で、６０％が男、４０％が女。全員寮生活。１年目で内容、２年目教え方、３年目現場実習。 附属小学校で４年生の総合科学の授業を参観した。初めに子ども達による歓迎のトーキングドラムと合唱。授業の指導案まで渡してくれた。金属の熱伝導の実験であった。日本の４年生と同じであるが、棒にはすでに蝋がぬってある上、アルコールランプの使い方の説明がなかった。子どもたちは渡された棒を火にかざして観察した。なぜ蝋をぬるのか、安全な使い方をするにはどうすればよいのかなど、子ども達に考えさせる場がなかった。外の教室のせいか子ども達の声が小さくせいか聞き取りにくかった。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	この活動には１９９８年から支援をしているとのこと。今回ちょうど巡回検診をしているところを視察させていただく。住民、特に母親、青年、子どもたちの健康状態を改善するために、ここでは、乳児の健康診断、住民の寄生虫検査、健康意識の向上を図るための紙芝居や劇をしていた。劇は地元の人も巻き込んでいる上、娯楽がない村であるので、たくさんの人が見に来て、楽しみながら学んでいるようだった。 村のチーフと伝統的な挨拶を体験した。向かって右の人から握手しながら挨拶をして回る。終わったら、相手がもう一度向かって右の人から挨拶を始める。チーフとは直接話ができない。間に通訳をおいていた。また、やしのお酒も飲ませていただいた。こういう貴重な体験ができたのも、丹専門調整員が日常村の人たちと関わり、よい関係を築いているからに違いない。 またパーム油を作っている村にも案内していただき、パームの実を見ることができた。ココやし、パームやし、バナナの木の区別ができるようになった。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	ヨシケントラベルの田村さんから聞いた話だが、クマシからケープコースト間の道路は日本の鹿島建設が、１ｋｍ通常２０００万～３０００万円のところ、５０００万円で請け負い、韓国の土建業者に丸投げして作らせたそうだ。舗装の仕方が悪い。 ケープコースト城は見た目はきれいだけど、奴隷を閉じ込めていた牢があり、悲惨な状況に心が痛んだ。奴隷は２週間から６週間牢に入れられ、男は銃３丁、女は１丁と引き換えだそうだ。金や銃と引き換えに、"Door of No Return"と書かれた出口から奴隷が遥か遠い新大陸に送られていった悲しい歴史がある。今、アフリカン・アメリカンが自分のルーツを尋ねてやってくるそうだ。 エルミナ城から眺めた風景も美しかったが、ケープコースト城と同じ歴史的背景がある。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	ポリテクニックは、ガーナに大学が９つしかないので、高校卒業者の受皿になっている国立の短期大学のような存在。大学よりレベルが低い。卒業しても学歴社会なので同じ事をしていても大学卒業者の下で働かなければならない差別を受けるとのこと。そういう不満から今学生がストライキに入っていた。しかし、ここの職員の方は自分次第だと言う。 学生はいないが、半田隊員が働いている学内を案内していただいた。ここでは先生の教育にも力を入れているし、実際高くなっているそうだ。日本に留学していた先生が２人出迎えてくださった。半田隊員はファニチャーコース担当だということだが、宿題を出そうにも、鉛筆１本程度しかなく、描く紙や、絵の具がないとかで出すことができない状況にあるとのこと。ちなみにガーナでの筆記用具はボールペン。
	オチェレコ・小規模潅漑農業振興計画視察	きっかけは１９７３年に、安定した食糧生産を目指したところから。１９９７年から５年＋２年の計７年のこのプロジェクトの協力が終了。反あたりの収量も増し、マネージメントも順調に進んでいる。複数回耕作できるようになったとのこと。米は４００ｋｇ収穫できて、収支が同じ。現在４７０ｋｇの収穫があるから７０ｋｇ分の利益がある。うまくいった時は、地元の人と「WAO　WAOアクション」をするそうだ。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	マーケット見学ではたくさんのお店がひしめき、すれ違えない程の人出にびっくり。ガイドのヤオさんについてくのがやっと。人々の熱気を感じた。 野口英世は黄熱病の研究のためにこの国に来て、その病気にかかってなくなった。今でもガーナ大学の傍に胸像が立てられ、研究室は校内に残されていた。今度千円札の絵がらに登場。注目を集めるだろう。 最終日にトレードフェアに出かけて買物をした。日本の感覚でいうと安いが、どれくらい値切れるのか分からなくて、値切りはあまりうまくいかなかった。
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	手荷物検査では、防虫スプレーはＯＫだったが、殺虫剤は没収。 ラマダジャービスヒースローホテルでミーティング（１９時半～２０時）後、周辺を散策。インド系の商店が多かった。道路にはゴミ箱があるにも関わらず、ごみがたくさん捨てられている。日没は９時頃ということでまだ明るい。イギリスのホテルは日本でいう１階がG階、２階が１階 first floor。水は硬水だが、飲めるとのこと。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	トイレ付きバスだったので、安心できた。 ２日目予約してあったホテルが西アフリカ国際会議が長引いて客が出て行かないとのことで、変更。なかなか次のホテルが決まらなくて大変だった。ホテルの部屋に入ったのが１０時過ぎ。 ケープコースト城隣のレストランでは、かなり待たされた。注文して２５分たって、「ピザは今からまだ２５分かかる」と言いに来た。パイナップルジュースを頼んだのに、「オレンジジュース」と言って持ってきた。「パイナップルジュースを頼んだ」と言ったら、「パイナップルジュース」だと言うが、飲んでみたらやっぱり、オレンジジュース。紙に注文を書いていったのにもかかわらず、注文したものが正しく出されないのはどうして？それがガーナなのかと思った。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月24日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	富山県立氷見高等学校	氏　名	高田　正光

1－1．あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

・実際に自分の目で開発途上国を見ることで、その現状を知り、自分自身の物の見方や考え方を広げる。

・現地の子どもや生徒たちとの交流を通じて、教育のありかたや国際理解に関する考え方を深める。

・慣れない海外で、参加者同士助け合い、意見を交し合うことで、お互いに学びあう。

・研修の主催者、参加者、協力隊員とのネットワーク（人脈）をつくる。

1－2．その目的やねらいの達成度

ガーナという国の現状をどの程度知ることができたか、自分自身の見方、考え方がどの程度広がったのか具体的にはまだわからない。しかし、確実に自分の中で何かが変わったような気がする。実際にガーナへ行き、JICA のプロジェクトを見、ガーナの人と交流してきたという事実をこれから実践に生かしていく事で実感する場面に出会えると思う。また、現地では参加者同士互いに思いやりながら行動できたと思う。自分が常に周りの人から助けられているということを感じられたし、自分からみんなの力になりたいと思うことができた。チームの中で良いつながりをつくることができた。

2－1．訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

子どもや生徒たちと交流したとき、興味・関心をもって話しを聞いてくれたこと、積極的に参加してくれたことなどとてもうれしく感じた。特に小学校で「けん玉」に関心を持ってくれた子が、一生懸命取り組み、上手にできたときに私が誉めると、とても満足そうで、そのときの笑顔が忘れられない。子どもや生徒たちの学びたい、知りたいという前向きな気持ちに触れ、すべての子どもたちが教育の機会を得られるような環境の大切さを実感した。

移動中に若い男性がのんびりしている光景をよく見かけた。国民性もあるだろうが、国の産業が不足している状況を強く感じた。高学歴や高い技術を身につけた人材が都市部や国外に流出していく現状が日本の地方の現状と重なった。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

はじめは遠慮がちでしたが、しだいに冗談を交したりとうち溶け合えたのも、不慣れな土地で苦労を共有しあう仲間として互いに思いやる気持ちがあったからだろう。視察地での情報を共有したり、互いに体調を気遣ったりと、自分本意にならないことで充実した研修になった。

普段なかなか交流する機会のない異校種、他県の先生方と行動をともにしながら、職場の様子、子どもや生徒たちについての情報交換を通じて、それぞれの現状を知るよい機会を得ることができた。

3．現地研修の経験の何を何につなげようと思ったか

自分自身がイメージしていた途上国と実際に見たものとの間に大きなギャップを感じることがなかった。普段メディアを通じて見ている状況は正しく伝えられていることを感じた。ただ、このように実感できたのも実際に自分の目で見たからであろう。何事も自身の目で見ること、体験することの大切さを再認識した。

協力隊員、専門家の方々はやりがいをもって任務に臨んでおり、また現地の人々から高い評価を得ている。ガーナでの生活は日本と異なり不便な面（水、マラリア、情報、治安など）がいろいろあり自分たちの恵まれた環境を見つめなおす良い機会になった。隊員としての資質は学力や技術も必要だが、まずはやる気と体力が大切である。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

まさに「人づくり」をねらいとした援助事業だと思った。なかでも教育分野に関しては隊員の方が一人でどの程度の影響を与えることができるのか疑問だったが、交流を通じて隊員の方の存在自体が確実に生徒や教員の意識を高める役割を果たせているように感じた。また、保健分野に関しては母親の子どもの健康を思う気持ちには国境はなく、村人たちの様子からこのプロジェクトがいかに求められ、有意義であるのかが伝わってきた。しかし、子どもたちが育ち、良い教育を受け、技術を身につけたとしても国内ではそれを生かせる場面に恵まれない状況であることから、このままでは良い人材の流出がすすみ、せっかくのJICAの援助の効果もうすれそうな気がする。国としては受け皿を充実させるまで余裕はないのかもしれないが、国に対しての働きかけや他の援助との連携の必要性を感じました。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

自力ではなかなか行くことのできない国、見ることのできないところへ行くことができた。ガーナでの生活や社会の状況を知ることで、現在の自分がいかに恵まれた環境にいるのかを再認識するとともに日本という国について考える良いきっかけになった。

現地では現役隊員の活動している現場で隊員自身から生の声を聞け、これまで遠い存在だった協力活動を身近に感じることができた。いろいろな場面で自分自身の知識の少なさを思い知らされ、国際理解に対する興味・関心が深まった。さらに他県、異校種の先生方と知り合え、それぞれの教育現場にかんする情報交換を通じて、教育に関する意識も高まった。

指導者研修に関しては時間の制限もあり参加しにくい状況だった。もっと近県で、各回の時間も長くないほうが参加しやすいと思う。

6．その他全般を通じての感想・意見など

現地では短期間にもかかわらず多くの場所を視察することができたと思う。予定通りに行かない場面もあったが、お互いに自由に意見を交し合い、柔軟に対応できていたと思う。

現地では自身の知識不足、英語力不足で話しをきくのがつらい場面が多かった。マラリアの心配がストレスになった。しかし、これらも良い経験だったと思う。

7．訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3テテクアシカカオ農園見学を含む）	国の主要輸出品だけあって、栽培から選別・出荷まで、その品質の管理には十分気を使っていることが感じられた。 テマでは労働者の多さ、倉庫の大きさから規模の大きさを感じ取ることができた。労働者の身なりからは貧しさは感じられず、カカオに携わる人は安定した収入を得られているようだった。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	ガーナと日本の関係、JICAのプロジェクトについて具体的に知ることができた。教育分野では、就学率や教員の技能についてが問題となっている。性に関する差別は見られない。国内における卒業後の受け皿不足による国外への頭脳流出については、日本の都市圏と地方の関係と同様な点を感じることができた。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	新たな競技の開拓という点で野球を取り上げられたというが、競技人口も増え、指導者も育つなど、順調に根付きができているように感じられた。しかし、金銭面による問題点を解消するにはまだ時間がかかりそうである。隊員の技術面より生活面の指導に多くのエネルギーを使うというコメントも印象的であった。
	JICA専門家・隊員との交流 （8/6JICA関係者との懇親会を含む）	専門家・隊員の方々の日常生活について聞くことができ、大変興味深かった。任地での生活はいろいろな苦労もあるようで、便利な生活に慣れた私たちにとっては少々敷居の高さを感じた。任務の内容ばかりに目が向きがちになるが、現実問題として現地での生活があり、任地の人たちの中で生活することで、任務に対する理解が深まり、「やりがい」につながるのだということを知った。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	主要な電力供給源であるダムは国外にも送電しており、その大きさに圧倒された。しかし、視察地で送電に関する問題点（停電）を聞き、インフラ整備の不充分さを感じた。全般的に自然が豊富で一見して環境的には問題がなさそうだが、木が立ち枯れしていたり、森が少ないなど、検討材料もありそうだ。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	大規模校だけあってコースや教職員、施設、設備などすべての面で充実していた。期末試験期間中であることから、教科書やノートをひろげて勉強している生徒を教室や食堂でみかけた。その様子は日本の生徒とまったく同だったのが印象的だった。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	交流中に生徒たちが日本語で挨拶してきたり、日本語を知りたがったりする場面に出会い、広瀬隊員の影響力、ガーナと日本とのつながりの築きを実感した。生徒たちがわれわれに対して物怖じせず積極的に交流を求めてくる姿勢は日本の生徒たちにも見習ってほしい点である。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	正しい知識を教えることのできる教員が少ないという事実に驚いた。しかし、公立学校の教員の質を問われるのは日本も変わらない。 研修により質の向上はみられるだろうが、もともと教育に関心のある人材が教員になっているとはいえない状況で、どの程度効果が期待できるのだろうか。教職が魅力のある仕事といえない社会全体の考え方を改善する必要性を強く感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	子どもたちは先生の話しや指示を良く聞いていた。実習を通じての授業で子どもたちも興味を持って取り組んでいたが、実習をする環境としては不充分さを感じた。 日本の様子を紹介しているときの子どもたちの興味深そうな目がとても印象的だった。活動に対しても物怖じせず積極的に参加してくれた。ただ、子どもの質や環境については教員養成校内の小学校だからという特別な雰囲気も感じられた。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	村全体が積極的に参加している様子が感じ取れた。生活の便利さでは都市部と地方の大きな較差を感じたが、保健分野には関しては地方にも十分な取り組みがなされているように感じた。 劇や紙芝居を見学するときに家族単位ではなく、男だけの集団と女だけの集団となっていたのが印象的だった。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	実際に奴隷売買が行われていた現場に立ち、各所で説明を受けながらあらためてその事実を振り返り、人権について考える良い機会になった。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	実習設備等は非常に充実していた。学生のストをきっかけにガーナにおける社会的な一面を知ることができた。ガーナにおける学生の数量的感覚についての問題点を聞き、理数教育の重要性を感じたとともに最近の日本の生徒たちの状況との類似性を感じた。 半田隊員が協力隊員を希望したきっかけが中学生時代の授業にあったいう話しを聞いて、教員の国際理解に関する（子どもや生徒の心に響く）取り扱いの重要性を感じた。
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	小規模といいながらもかなり大きな農地を見ることができた。現地の人間による運営が軌道に乗っているように感じられ、プロジェクトの根付きが進んでいるようだった。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	都市部と地方との較差の大きさを知った。マーケット、主要道路沿いでは多くの人がいて、物もあふれていた。地方では民家も疎らで、日干しレンガの家があったり、水が共有の井戸であったりと生活の便での違いも目立った。 野口英世がガーナで有名でないと知り少々がっかりした。しかし、研究を行っていた環境などから、野口英世のもっていたエネルギーの大きさと医学に対する強い信念を感じた。
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	成田←→ロンドンでは日本人の多さに驚いた。12 時間というフライト時間も研修に対する緊張からかそれほど長く感じなかった。ロンドン←→アクラは日本人や日本語を見ることもなく、遠い国に来たことを実感した。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面 （ホテル レストラン）	われわれが滞在したホテルはどれも安全ですごしやすく、外国人が観光目的で十分滞在できる国だと感じた。ただ、ホテル側から突然のキャンセルがあったりと問題点はあるようだ。 食事は体調を気遣って、食べなれたもの（中華やイタリアン）、比較的高級なレストランで主にとっていが、何回か現地食も体験できた。味はとてもおいしく、油が強いのが印象的だった。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月２２日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	高岡市立博労小学校	氏名	谷口　徹

1－1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい(主眼点・期待など)

・ガーナ（開発途上国）の現状を五感を通して認識し、日本と開発途上国の関係とを理解する。

・ガーナでの学んだことを生かして、国際理解教育、開発教育を学校や地域で行う。

・ガーナで働くＪＩＣＡ専門家、青年海外協力隊員の活動の様子を見たり、話を聞くことを通して、今後の自分の行き方の参考にする。

・国際理解教育・開発教育を進めていくための教師間のネットワーク作り。

1－2. その目的やねらいの達成度

・短期間の滞在ではあったが、ＪＩＣＡスタッフの支援もあり普段見たり聞いたりすることのできないガーナの姿をつぶさに見学できた。また、日本のＯＤＡ（政府開発援助）やＪＩＣＡの活動がガーナの人たちと深く関わっていることもわかった。

・水も電気もないような所でも、意欲的に明るくたくましく活動するＪＩＣＡ専門家・青年海外協力隊員の姿を見て、自分の毎日の生活を見直す機会となった。

・小学校や中学校の社会科の時間などでＪＩＣＡの活動を知り、いろいろな道をたどりながらも専門家・隊員となったことを知り、教師の果たす役割の大きさを認識した。

2－1. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど)

・子どもたちの笑顔のすばらしさ

日本の子どもと同じである。厳しい環境にもめげず、子どもたちは屈託のない笑顔を見せていた。そして、私たちの訪問を温かく迎えてくれた。

・自国の歴史を振り返ることの大切さ

「歴史は繰り返される」という言葉があるように、自国の歴史をしっかりと学習し、その反省を生かした国づくりが必要であると痛感した。知りたくない・見たくない自国の歴史はあるだろうが、それをしっかりと見つめ、そしてその上での国づくりをしていかないと本当の国づくりにはならないと思う。

これは、日本の戦後の政治、教育にも言えることであると思う。

2－2. 参加者・スタッフから学んだこと(気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど)

・マラリヤの恐怖におびえながらのガーナでの滞在期間中、明るく元気に振る舞う参加者が多く、そのことが　メンバーのモチベーションを高めるのに有効であったように思う。

・日程が過密な上、ホテルの予約がキャンセルされたりスケジュールが何度も変更される中、メンバーの人権や健康面の配慮も必要とされたため、話し合いを設けたのも結果的にはよかったように思う。
・がまんすることも大切であるし、おもいきって言うことも時と場によって必要であると思う。問題は誰のために、何のための行動なのかをはっきりさせておくことではないかと思う。

3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

・開発途上国でがんばるＪＩＣＡ専門家や青年海外協力隊の隊員の活動を、自分自身や子どもたちの今後の生き方の参考として伝えたい。
・ガーナ（開発途上国）の現状を知らせ、自分の生活を振り返り、自分にできることについて考える機会としたい。
・ガーナでの人々の暮らしから、異文化に対する理解と関心を増すようにしたい。

4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

・ＪＩＣＡ単独の事業もいいが、地元ＮＧＯといっしょに取り組んでいるＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）の活動はとても有意義に思えた。
・ＪＩＣＡの専門家、隊員はいずれいなくなる。その時、地元の人たちでその後の活動を行えるように人づくりをすることはとても大切なことである。専門家・隊員が主体の事業ももちろん大切であるが、最初から地元の人と共同で行う取り組みの重要性が認識できた。
・隊員の方達が、水や電気も十分でないところにもかかわらず、たくましくしかもしたたかに取り組んでいる姿を見聞きし、日本の青年がもっと海外で活動できるシステム（休職後の職場復帰などの法整備）を急ぐことが日本の国にとっても途上国にとっても大切であると思う。

5. 研修(事前研修等を含む)に参加して良かったことや、より良くするための提案

・この研修に参加しなければ行けないところや会えない人に会う機会に恵まれたことは大変うれしかった。
・今回のガーナでの研修で、アフリカの自然や子どもたちが身近に感じられるようになった。
・スタッフ（ＪＩＣＡ、ＮＩＤＥ）の役割分担を明確にして、参加者に伝える。
・訪問先の事前学習（個々の開発援助事業の内容）をしっかり行い、現地で有効に時間が使えるようにする。

6. その他全般を通じての感想・意見など

・ガーナ大使館を表敬訪問した際、浅井大使が「アフリカを知らない人は世界の半分しか知らないことと同じである」というようなことを話されたのが印象に残った。
・ガーナに行ってみて、行く前と気候、風土、建築物、人など自分のイメージしていたアフリカとの違いに驚いた。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学	ココアの積み荷の作業がほとんど人の手で行なわれていることに驚いた。さらに、その作業が素早くテキパキ行われていることに、ガーナ人の男のたくましさを痛感した。 （ガーナでは、男性はあまり働かないと聞いていたので）
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA事務所訪問	ガーナの政治、教育、衛生状況などを説明していただき、その後の活動を行う上での基礎となった。 ＪＩＣＡ専門家、青年海外協力隊員の具体的な数や活動内容がわかった。
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	野球を通して、ガーナ人と親しく交流する姿に、スポーツには国境がないというのを実感した。 ガーナの青年達といっしょに野球をしたのは実に楽しかった。 また、子どもたちともキャッチボールやサーカーでも交流ができたのは有意義であった。
	JICA専門家・隊員との交流	ＪＩＣＡ専門家・隊員が水も電器も不自由な中、いろいろと工夫しながらしっかり地元にとけ込んで活動していることを飲食をともにしながらリラックスして聞くことができた。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	たった一つのダムから西アフリカの他の三カ国へ電気を供給していることを聞き驚いた。日本では、スイッチを押せば電気がつく、お湯が沸くのを当たり前すぎて考えたこともなかったが、アフリカでは電気もない人や少ししか使えない人が多くいることを改めて知った。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	小浜隊員の案内で校内を見学した。女子寮は改築中ということであるが、日本の教室くらいの部屋に２０名が生活しているのを見て、プライバシーや人権のことまで配慮できない状況であることがわかった。 学生達は、試験勉強中ということもあり、真剣に自習する姿が見られた。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	日本の学校の様子を紹介したり、いっしょに縄跳びを跳んだり、剣玉、折り紙などで交流した。人なつっこい子どもたちは、私たちに大変興味を示しながら喜んで交流の輪に入ってきた。言葉が通じなくても、お互いの気持ちが通じ合えたように感じた。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	中央研修より校内研修を充実しようとしている行政の方針の中身がよくわかった（カリキュラムリーダートレーニングを使った方が安上がり）。 教育の重要性が、行政の中でも理解されつつあるように感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	公開授業では、熱の伝導を行っていたが、教科書もノートもなく、アルコールランプも初めて使う子どもたちを見て、安全性や教師の発問に疑問を感じることが多かった。 教師の力量や教材の不足が、子どもたちの学力問題に深く関わっていることを目の当たりにした。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	ＪＩＣＡと地元NGOが共同して事業をするよさがよくわかった。 村の長が、私たちを温かく迎えてくれたことに感謝したい。 １０代の妊娠・ＨＩＶの危険性を劇や紙芝居を通して住民にわかりやすく説明しているのに感動した。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	１５００万人の奴隷が、アフリカ人の手によって捕らえられ売られていったと聞き驚いた。アフリカがヨーロッパ列強の勢力争いに巻き込まれてきた歴史を、城の見学を通して聞くと大変重みがあった。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	生徒がストライキ中であることを知りまずは驚いた。しかし、大学と専門学校の差別をなくすための運動であると聞いて納得した。半田隊員が、小学校の時の社会科でＪＩＣＡのことを知り夢を実現したと聞き、小学校教育でも一人の青年をアフリカまで行く決意をする原動力になることを知りうれしく思った。
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	アフリカのイメージと水田の風景が一致しなかったが、目の当たりに田植えをしている親子を見て、子どもの頃の自分の姿とだぶって見えた。水田を作るために灌漑用水が果たした役割の大きさも理解できた。自分のクラスの子どもたちも総合的な学習で「米」をとりあげているので、米を切り口として国際理解教育を行いたい。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等	市内でも数ｋｍ走れば街並み（家の構造）が全く変わるのことに驚き、貧富の格差を感じた。
行き帰り	名古屋←→成田←→ロンドン←→アクラの行き帰り	ガーナを植民地にしていたロンドン市内を訪問できたことは、特別感慨深かった。 数時間の訪問だったが、イギリス留学経験をもつ花房さんのおかげで地下鉄を乗り継ぎ大英博物館などを見学できた。飛行機の待ち時間を有意義に過ごすことができ感謝している。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	オチェレコで灌漑農業振興計画を推進している清治さんと交流できたことは大変有意義であった。 帰国後もメール交換も行い、いろいろアドバイスをいただき感謝している。

JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月 14 日	訪問国	ガーナ共和国
学校名	静岡市立高等学校	氏　名	寺田仁

1－1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

① jica の援助によってどのように変わったか。どうかわるとよいか。について現地の人の声を聞く。

② どんな援助が必要とされているかについて考える。

③ 理科教育の普及度について調べる。

地域の中での学校の役割

上級学校での理科教育

④ ガーナの人は日本について何を知っているか。

⑤ ガーナの人々の生活の満足度

⑥ 学校内の規範、カリキュラム

⑦ 子供の一日の生活、夢、楽しみ

⑧ カカオ農園の労働の実態

⑨ フェアトレード導入前後の変化

1－2. その目的やねらいの達成度

概ね目的は達成できた。ただし、これらの目的は出発前に予定されていた範囲について考えたものである。したがって、一部訪問できなかった分野については不明であり、調査する機会を逸してしまった。

2－1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

① 教育の重要性を再認識した。

国を盛り上げていくには、いくら資源があってもだめであり、国民の教育によってはじめて その国力の発揚に結びつくと感じた。

② 自国の歴史の重要性

自分の国の歩んできた歴史を知ることによって、未来を過たずに歩めるのではないか。

2－2．参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

個人による研修より格段に参加者の皆さんから援助していただいた。よかった点は以下のとおり。

① 一人では気づかなかった事項について、多面的な視点を持つことができた。

② 聞き逃してしまった点について確認が取れた。

③ 写真撮影の労を分担できた。

3．現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

研修で得た情報を生徒に還元していく。

① 国際社会の中での日本の位置、立場を再考すべきである。

② 開発途上国の現状を伝える。

③ 援助の現状を伝える。

協力隊・専門員・円借款・無償貸与・草の根運動

④ 援助のあり方を考えさせる。

4．ＪＩＣＡの開発援助事業に対する感想や提案

開発援助の成功が一朝一夕でないことは言を待たないが、協力隊員はじめ多くの人々の尽力が各種プロジェクトの遂行に収斂されていると感じた。より効果があり、かつ地元に定着する援助事業をおこなっていることも知った。実際に開発支援によって生活の向上があった事例を多分野で見て感激した。教育分野の支援についても、日本ならでのノウハウがあったればこそできる支援だと感じる。

しかし、援助慣れしてしまった国民体質、上級教育を受けた人々の海外流出、教員の低い資質、産業がない故の就業困難など国として抱える問題の大きさゆえに、援助支援がその特定分野で効果が上がってもその国全体を見たとき、その国の発展にどれだけ効果が上がっているのか計り知れない感がある。とりわけ、政権の転覆によって営営と積み上げられてきたjicaの援助が一瞬の間に無に帰すのではないかという危惧さえ感じる。

5．研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

グループで行動する上での準備は早い段階から必要。グループ内での打ち合わせの時間を事前研修の早い段階でやるべきである。（現地へのお土産、日本紹介の準備など）

6．その他全般を通じての感想・意見など

① 健康の大切さを痛感した。

② Jica の現地スタッフ（協力隊・シニア・専門員を含む）との交歓会がよかった。赴任先を訪れるのは限度があるので集まっていただいたところでいろいろと意見を聞かせていただいてよかった。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
7/30(金) アクラ	ココア輸出選別・出荷の行程の見学（8/3 テテクアシカカオ農園見学を含む）	ひとつの産業として成り立っているカカオ輸出が品質管理で成立していた。 テテクアシ・カカオ農園訪問はまったく無意味。観光化されてしまっていた。実際に農園として営まれているところで、そこの農民の人々にその実態について話を聞きたかった。
	日本大使館表敬訪問・ガーナ教育省表敬訪問、JICA 事務所訪問	・「国づくり・人づくりは自助努力が基本である。jica はそのお手伝いをしている。」との小淵次長のお話が耳に残る。 ・大使にお会いできるとは一生の中でもなかなかないこと。 ・教育省：就学率、小中 80%・・・本当？・・疑問。今年行われる大統領選挙に伴って戸籍調べをしたとも言うが、定住している人ばかりでもないしね。この国の統計特に人員に関するものはあやしい？
7/31(土) アクラ	テマ・山口隊員任地視察（野球指導）現場訪問	体調不良のためホテルで休養。
	JICA 専門家・隊員との交流 （8/6JICA 関係者との懇親会を含む）	JICA 専門家・隊員は小学校の先生から影響を受けてこの道に入ったという人が複数いた。国際理解教育を通して jica の海外支援活動を生徒に伝えるのは教員の仕事だと感じた。世界にはばたく日本人を育成したい。
8/1(日) アクラ→ホ	アブリ植物園、ブチ滝、アコソンボダム見学	cocoa の実が幹からにょきにょきと出るさまはなんとも不思議でならない。チョコのベースビーンズとして使われているのは「フォラステロ種」。 酸味・渋味が強いのが特徴で、発酵前に豆を割ると中は紫色になっている。 グレード NO.1 はガーナ産で、生産量は世界第２位。 ガーナ産は他の豆よりも酸味が少なくマイルドなのが特徴で、チョコレートづくりに一般的に広く使われている。
8/2(月) ホ→ アクロポン	ケジェビ・小浜隊員任地視察（理数科教師・大規模校）	アクラからはるかかなたの距離。想像していたよりも大きな学校でびっくりした。学校はテスト中であった。富山県高岡出身の女性、小浜隊員の指導は目に見えて効果があったという（教頭先生談）。「今年１１月の任期まで精一杯頑張る」と目がきらきらしていた。人間、認められるというのは大切なことだ。また、認められようと彼女も努力したそうだ。
	タニベ・広瀬隊員任地視察（理数科教師・小規模校）、生徒との交流	ケジェビ・アサト高校と比べるととても小さい規模（生徒 180 名、教師 9 名）。 放課前だというが，われわれの大幅遅延にもかかわらず生徒を待たせていたのではないかと心配する。早速交流をして参加者大満足。反面、赴任して８ヶ月の広瀬隊員と十分な話をできず。
8/3(火) アクロポン →アクラ	ＳＴＭ（小中学校理数科教育改善計画）プロジェクトの視察	小浜専門員は元協力隊員の奥さんとアクラ在住。２人のガーナ人スタッフと手がけているプロジェクトは最終段階。この仕事は重責だと言っていた。教員の生活水準は決して低くないという彼の見解。他で聞いた話とは少々異なる。教員の資質向上は一筋縄には行かない。なかなか進まない仕事の原因は、ガーナ人自身がこの国を変えていこうとしないところにあるのではないか。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか／その他感想
8/3(火) アクロポン →アクラ	教員養成校内小学校訪問（授業参観、校長と意見交換、生徒との交流）	校長と意見交換：1848 年からの歴史ある教員養成校。歴史ばかり感じて現場の教育にどれだけ情熱を入れているのかが感じられなかった。 小学校：授業参観は慣れたもの？しかしアルコールランプを斜めの机の上で使うという暴挙にはびっくり。 交流は大変盛況で、皆さんかかりっきり。急遽写真記録係をする。
8/4(水) コフォリドア →クマシ	ニューアプリＰＰＡＧ（地域保健総合改善プログラム）視察	酋長はなかなか威厳のあるお方。前知識どおりのご挨拶をおこなう。その後、98 年からプロジェクトの中心として活動しているメアリーおばさんについて５歳以下の検診などを視察。英語と現地語での写真による性病感染予防の啓蒙活動では、住民の皆さんが大笑いしながら明るく見ていたのが印象的だった。その後の劇や紙芝居も住民の皆さんは食い入るように見ていた。
8/5(木) クマシ→ タコラディ	ケープコースト城、エルミナ城見学	大勢の涙、汗、血が流され、自分の足下の地が固まった。そして黒人奴隷が白人によって行われたのではなく、対立する部族間闘争によって黒人自らが生み出したという事実を知って愕然とする。いずれにせよ、紛争・闘争によって悲しい歴史が作られたのは古今同じである。人間は歴史から何も学んでいないのか。
8/6(金) タコラディ →アクラ	タコラディ・半田隊員任地視察（ポリテクニック）	全国10校のポリテクのひとつ。現在生徒はスト中、１ヵ月半経過。卒業しても社会差別があることへのストだという。山形出身の半田さんはデザインを指導。直線が引けなかったり、スケールが読めなかったり、数量感覚がなかったり、教材がなかったりで色々と大変そう。しかし、とても前向きで、まわりに認められている自分を感じているという。
	オチェレコ・小規模灌漑農業振興計画視察	清治専門員はわが農大の拓殖出身。彼の前３代も全て農大という。ちょっとうれしくなる。５年のプロジェクトの後、２年のフォローアップの時期を経た。灌漑施設の整備だけでなく、営農指導、農協の組織化などを行い、マニュアルを作成した。jica が、農家自身が活動する推進役を行った好例だと思う。
8/7(土) アクラ	アクラ市内見学 野口英世旧研究室、マーケット等 （7/31 のアクラ市内視察を含む）	1927 年ここアクラに渡り 51 歳で生涯を閉じるまで研究に没頭した部屋を間近に見て、一個の人間の偉大さを感じる。田村さんがわざわざ案内してくださったことに感謝。Through devotion to science. He lived and died for humanity. マーケットはとんでもない喧騒の世界。アフリカの生活の全てが渦巻いているようだった。
行き帰り	名古屋⟷成田⟷ロンドン⟷アクラの行き帰り	ずっと体調が悪いので、ロンドンめぐりは断念。また来ます。ヒースローではシャワーを浴びてさっぱりし、横になってしばし仮眠。買い物をしない私にはお店が一杯でもさして感激することなし。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	国民の中に経済格差が広がっている。携帯電話など IT 関連の産業は好調だと言う。世界の波がこの国にも押し寄せている。波に流されないように一国がどのように進んでいくのか、しっかりした方向性を打ち出す必要性がある。それには指導者のカリスマ性か、国民の総意か。 観光にせよ各種産業は未発達状態である。逆を言えば今から如何様にでも発展するということだ。各国の援助がこの国の望ましい発展にさらに寄与することを望む。